

アルタクセルクセスの第 20 年とダニエルの「70 週」

©カール・オロフ・ジョンソン、ヨーテボリ、スウェーデン、1989 年発行
1999 年 2003 年改訂

アルタクセルクセス 1 世の統治の年代記と、ダニエル書 9 章 24 節から 27 節にある 70 週の関連の推定について質問に答えるには、小さな本が一冊必要になるし、実はそのような本こそ私が何年も書こうと計画していたものだ。それに関する題材の材料を何年も収集しているし、1989 年にはスウェーデン語で簡単な下書きを書いてみたりもした。しかし、その時から他の計画に私の空いた時間がとられ、この先数年以内に 70 週についての取り組みを再開できそうにない。以下の議論は、アルタクセルクセスが即位したのは、現代の歴史学者がいう西暦前 465 年ではなく、西暦前 475 年であるという考えを支持する、ものみの塔聖書冊子協会によって持ち出された議論の反対尋問である。

以下は、アルタクセルクセスの統治の年代記におけるスウェーデンの論文の簡潔な要約である。

1. クセルクセスは父のダレイオスと共同統治だったのか。

ものみの塔協会が、アルタクセルクセスの統治を 41 年から 51 年（彼の即位は 465 年ではなく 475 年と書かれている）に延長したことにより出てきた問題を解決しようと試みているのは事実である。というのも、クセルクセスの統治の最初の 10 年は、彼の父ダレイオスとの共同統治だったと議論し、前任のクセルクセス（西暦前 485 年から 465 年）の統治を 21 年から 11 年に短縮したことにより、アルタクセルクセスの統治が延長されたのである。

このような共同統治の支持に関する証拠はこれっぽっちもない。聖書辞典、「聖書の洞察」第 2 号（1988 年）の 614 ページから 616 ページにおける、ものみの塔協会の議論は、歴史的証拠をひどくねじ曲げている。それゆえに、615 ページで彼らはこう主張している。

クセルクセスと父ダレイオスの共同統治に関する確かな証拠がある。ギリシア歴史学者のヘロドトス（5 世紀）はこう言っている。「ダレイオスは、クセルクセスは王位にふさわしいと判断し、彼を王とすることを宣言した。だが、私

見によれば、クセルクセスはこの助言なしでも王になれたであろう。」これは、父ダレイオスの統治間にクセルクセスが王位についたことを示している。

だが、ヘロドトスの陳述を見ていくと、すぐ次の文で直接的にものみの塔の主張を否定しているのがわかるだろう。ものみの塔協会は、クセルクセスとダレイオスの共同統治が10年間されたと主張するが、ヘロドトスは、後継者としてのクセルクセスの取り決めの1年後にダレイオスが死んだと陳述している。ヘロドトスはこういつている。

その時、クセルクセスは次の後継者として公に宣言されていたし、ダレイオスは自由に戦争に注意を移すことができた。しかし、準備が整う前に死が彼を遮った。彼は、36年の統治の後、この出来事とエジプトの反乱の起きた翌年に亡くなり、エジプト人またはアテナイ人を罰する機会が奪われた。彼の死後、王位は息子のクセルクセスにわたった。

すると、ダレイオスは亡くなる1年前(10年ではない!)に後任者としてクセルクセスを任命していたことがわかる。さらに、ヘロドトスは、ダレイオスがクセルクセスを共同統治者として任命したとは言うておらず、後継者として任命したのだ。(追記、たとえば、一説の言い回しは、ペンギンブックスのオーブリー・デ・セリンコート翻訳による、ものみの塔協会から引用されている)これまでのパラグラフでは、ヘロドトスはペルシア王たちの間にあったルールは、彼らが戦争に行く前に、戦いで彼らが殺された場合に備え、ペルシア王たちが王位の後継者を任名するためのものであったと説明している。ダレイオスもこの習慣に従ったのだと彼は言っている。

そして、ものみの塔協会は、ヘロドトスは文脈から外れており、ものみの塔協会の主張への反論を省いていると言っている。信じられないことだが、彼らはこの偽物を「確かな証拠」と言って紹介しているのだ!

共同統治を支持する彼らの聖書辞典に出てくる他の「確かな証拠」には、同等の質のものがある。例えば、ペルセポリスで発見された浅浮き彫りがあり、それは1932年にヘルツフェルトがクセルクセスとダレイオスの共同統治の徴候を感じたものだという。(洞察2章615ページ)しかし、この考えは、現代の歴史学者に却下された。皇太子が王の後ろに立っているのが描かれたものがあるというまさしくその事実が、彼が王や共同統治者ではなく、任名された後継者であるということを示している。次に、レリーフにはひとつも名前が見つかっておらず、王位にあったのはダレイオスであり、皇太子はクセルクセスであるという結果は、推定以外の何でもない。J・M・クックはペルシアの歴史におけ

る活動で、皇太子はダレイオスの長男アルトバザネスであると議論している。(クック、ペルシア帝国、ニューヨーク 1983 年、75 ページ) A・B・ティリアやヴォン・ガルのような他の現代の歴史学者たちはこう論じている。王はダレイオスであるはずがなくクセルクセスに違いない、したがって、皇太子はクセルクセスの息子である!と。(クック、242 ページ 24)

共同統治の主張に関する「バビロニアからの証拠」として、ものみの塔協会はまず紀元前 498 年から 496 年にかけて、バビロンに建てられた「クセルクセス宮殿」に言及している。しかし、この宮殿が「クセルクセスのために」建てられたという証拠はひとつもないのだ。J・M・クックは、クセルクセスが西暦前 486 年のダレイオスの死のつい 1 年前に後継者に任名されたというヘロドトスの陳述に言及し、こう加えている。

これについてヘロドトスが正しいとしたら、490 年前半にバビロンに王の息子のために建てられた邸宅は、アルトバザネスに向けられたものである。(クック、74 から 75 ページ)

そして、宮殿はクセルクセスとダレイオスの共同統治とは何ら関係ないことを証明している。

共同統治を主張する最後の「証拠」は、クセルクセスの在位年の日付がある 2 つの粘土板である。ものみの塔協会によれば、最後の粘土板にダレイオスの最終即位紀元の日付を付す前の数ヶ月の日付が両粘土板にあるという。(洞察 2 章 615 ページ) 2 つの統治期間のこの「重複」こそ、共同統治を示している、と論じている。

しかしこれは、ものみの塔協会がこれら 2 つの書字板に関する真実を隠しているか、この問題についてとても質の悪い調査をしたかである。トンプソンがいうには、トンプソンが 1927 年から彼のカタログで「A. 124」として載せた最初の書字板には、クセルクセス (486 年から 485 年) の在位年の日付がない。これは、トンプソンによる印刷ミスだった。実は書字板には、クセルクセスの最初の年 (紀元前 485 年から 484 年) の日付があったのだ。これは、1941 年のジョージ・G・キャメロンのセム語族とセム語文学のアメリカンジャーナル第 3 号 320 ページの 33 まで遡って指摘された。したがって、2 つの統治期間に「重複」はなかったのだ。

M・サン・ニコロとA・ウングナドの1934年からの共同著書の634号として出版された、2つ目の書字板「VAT 4397」は第5の月（Ab）まで日付がある。だが、著者が月の名前の後にクエスチョンマークをつけたことは注意書きされるべきだ。書字板の月のサインは、破損しており、いくつかの方法で再建築された可能性がある。パーカーとデュバーシュタインの共著には1956年に出版されたバビロニア年代学があり、この本では、同じ書字板が「VAS VI 177」と指定され、権威者たちは、書字版は「月のサインに損傷があり、IX（9）かもしれないが、おそらくXII（12）である可能性の方が高いだろう」と指摘した。ニコロとウングナドの最初の推定は全面的に却下された。第7ヶ月目にダレイオスが亡くなったように、書字板には第9ヶ月目か第12ヶ月目が後継者の在位として日付があるので、かなり正しいといえる。この2つの統治期間には重複がなかった。

2. テミストクレスの飛行

ものみの塔では、テミストクレスのペルシアへの飛行についての出版物が多く作られている。この議論は古いものであり、17世紀のイエズス会神学者デニス・ペータウ（ペタヴィウス）とカトリック教会の大司教ジェームス・アッシャーに端を発する。1832年にベルリンで出版されたE・W・ヘングステンブルグの書籍 *Christologie des Alten Testaments* でかなり詳細が書かれている。ギリシアの歴史学者トゥキディデスとランプサコスのカロンによるものだ。

アルタクセルクセスは、テミストクレスがペルシアに到着した後話した王だった。ものみの塔協会は、テミストクレスは紀元前471年または470年頃亡くなったと論じている。したがって、アルタクセルクセスはその時よりも前に統治を始めたはずで、紀元前465年ではないという。（洞察2章614ページ）これらの議論はうわべだけの力である。というのも、ものみの塔協会は非常に重要な情報を除外しているのだ。テミストクレスがペルシア到着後にアルタクセルクセスに会ったという彼らの主張の証拠は、プルタルコスの「トゥキディデスとランプサコスのカロンはクセルクセスの死に関連していて、テミストクレスが面会したのは、彼の息子アルタクセルクセスであった」という情報から引用されている。しかし、彼らはプルタルコスの2つ目の陳述を除外している。その陳述とは、こうだ。

「しかし、エポロス、デイノン、クレイタルコス、ヘラクレイデス、そしてその他がテミストクレスはクセルクセスに会うために来たと言っている。私には、

年代順のデータから考えて、トゥキディデスはより一致しているように見える。確実に言えることではないが。」

それから、ものみの塔協会はあることを隠しており、それはプルタルコスが続けて述べた、古代の歴史学者の多くがこの出来事について書いており、これらのほとんどが、テミストクレスがペルシアに来た時に王位にあったのはアルタクセルクセスではなくセルクセスだったという内容である。

プルタルコス（西暦 46 年から 120 年）は、トゥキディデスはもっと信憑性があると感じていたが、年代順のデータが確実ではないことをストレスに感じていた。たいてい無視されていた 1 つの事実があって、トゥキディデスは紀元前 406 年以降、またはこの出来事の約 2 世代以降にテミストクレスの飛行についての話を書いていたということである。この話は彼の陳述と矛盾していて、それが彼の情報が信憑性に欠けていることを示している。（これに関しては、ケンブリッジ古代歴史 5 1992 年、14 ページを参照）

だが、テミストクレスが本当にアルタクセルクセスに会っていたとしても、これが 470 年代に起きたと示すものは何もない。テミストクレスが紀元前 471 年または 470 年に亡くなったという主張を支持するこれ以上の証拠はないのである。協会が言及している情報源でそう言っているものは何もない。そして、プルタルコスを含む情報源のいくつかは、ずっと後の紀元前 459 年に彼が亡くなったと明確に示している。（プルタルコス英雄伝 31: 2-5）テミストクレスをアテナイで名誉棄損しようとしてから、アルタクセルクセス（またはクセルクセス）に面会するまでかなりの時間が過ぎた。テミストクレスの敵が勝利し、最初はアテナイ、最後はギリシアからテミストクレスを逃がす前に何度か試みがあった。ケンブリッジ古代歴史（5 巻 62 ページ以下）はこのフライトを紀元前 569 年としている。彼はまず小アジアの友達のもとに逃げ、そこにしばらく滞在した。協会は、テミストクレスの名誉棄損の始まりを 471 年または 470 年と支持するディオドルス・シクルスを引用しているが、ディオドルスの「テミストクレスの小アジア到着時、クセルクセスはまだペルシアで王位についていた」という陳述について言及していないのだ！（ディオドルス・シクルス 11 巻 54-59）もちろんこれは、トゥキディデスの陳述と小アジアからのアルタクセルクセス宛のテミストクレスの手紙に矛盾している。

小アジアでしばらく、明らかに数年経った後に、テミストクレスはついにペルシアに行った。そこで、まず 1 年、王に会う前に言語を勉強して過ごした。この面会が紀元前 465 年または紀元前 464 年はじめの終息に向かったのかもしれ

ない。A・T・オルムステッドが議論するようにクセルクセスはテミストクレスがペルシアに来たとき、王位として大活躍していたようだが、その後まもなく亡くなった。そのため、テミストクレスは1年の語学勉強の後、アルタクセルクセスに会った。こうしてみれば、古代歴史学者の陳述との矛盾が少なくとも部分的にはなくなる。

ペルシア王に会った後、テミストクレスはマグネシアの地に落ち着き、亡くなる前の数年をそこで過ごした。(プルタルコス『英雄伝』31巻2-5) したがって、彼の死を、ものみの塔協会が主張するような紀元前471年または470年とするのは全くもって不可能である。

3. アルタクセルクセスの統治期間である「50」や「51」の日付のある2つの書字板

アルタクセルクセスの統治期間は41年ではなく51年であるという主張の支持について、ものみの塔協会は2つの書字版にそれぞれ「第50年」と「第51年」と日付があることに言及している。1つ目の書字板は、E・ライヒティ、A・K・グレイソン共著の大英博物館バビロニア書字板目録第7巻(ロンドン、1987年)にBM 65494が載っているが、まだ未出版である。一方、2つ目の書字板、CBM 12803は、アルバート・T・クレイにより1908年「ペンシルバニア大学バビロニア探査隊シリーズA: 楔形文字テキスト」、第8巻、第127号で出版された。アケメネス朝の歴史に関する権威者はみんな、これらのくさび形文字は両方とも誤記を含んでいると同意している。

ものみの塔協会が指摘したように、アルバート・クレイによって出版された書字版は日付が2つある。書字版の日付は「第51年、即位年、第12の月、20日、ダリウス、諸国の王」と付けられている。(洞察、616ページ)そしてこの本文は、第51年(明らかに、アルタクセルクセス1世だが、本文に名前は出てきていない。)と彼の後継者ダレイオス2世の在位年と同等のようだ。

しかしまた、ものみの塔協会は真実について全く言っていない。というのも、真実を言うと完全に話を変えてしまうからです。多くの日付のある書字版は、ムラシュー族から古記録が発見されたおかげで、アルタクセルクセスの統治の終わりから残っている。イスタンブールムラシュテテキスト(イスタンブール、

1997年)でV・ドンバズとM・W・ストルパーは、ムラシュの古記録は「クセルクセスとアルタクセルクセスの間における、アケメネス朝のバビロニアに関して、もっとも大きくて入手可能な文書材料」と説明している。(4ページ)書字版のほぼすべてが、アルタクセルクセス1世と彼の後継者ダレイオス2世の統治の日付を付している。番号は、以下グラフからわかるように、アルタクセルクセスの統治の最後の2年とダレイオス2世の統治の最初の7年で終わっており、上記で述べたV・ドンバズとM・W・ストルパーの著書の6ページに記載されている。古記録は、アルタクセルクセスの第41年とダレイオス2世の在位年から60を超えるテキストを含み、ダレイオス2世の第1年には約120もの日付が付されている!

保管されているすべてのムラシュのテキスト、また各年のテキストの数

古代のギリシア歴史学者によって示されたように、アルタクセルクセスの死後の数ヶ月は、大混乱の期間だった。彼の息子であり後継者のクセルクセス2世は、兄弟のソグディアノスに在位わずか数ヶ月後に殺された。強奪者のソグディアノスは、紀元前423年2月ダレイオス2世によって殺される前までの約7ヶ月間王位を握っていた。しかし、ソグディアノスが法律上正統な王として認められることがなかったので、筆記者は、アルタクセルクセスの死後も数ヶ月、統治の日付を付けていた。何人かの学者が論ずるように、アルタクセルクセスが第40年の終わりにかけて死んだというのはいり得るし、そのため筆記者は第41年を含むために人工的に彼の統治期間を延ばさなければならなかったのだ。

ダレイオス2世がバビロニアの月で第11ヶ月(紀元前423年の2月と3月の一部が一致している)に王位に登りつめて初めて、筆記者は彼の統治もテキストに日付を付け始めた。しかし、混乱を避けるため、筆記者はたいてい、第41年(アルタクセルクセスの)とダレイオス2世の在位年の2つの日付を付けた。これがされたのには理由があって、彼らにとって統治の確かな年代記を記録するのは非常に大切なことであったからである。これは、彼らのカレンダーであり、政治的な出来事や天体観測、経済活動といった様々な出来事の日付を付すことによってできる「時代」であったのだ。

そのような2つの日付がある書字版は多く発見されている。F・X・キューグラーは、彼の著書 *Sternkunde und Stemdienst in Babel, II. Buch, II. Teil, Heft 2* (ミュンスター 1924年)の396ページで、これらの書字版の中から4つの年代記の情報を記載している。この種の他の書字版もそれ以来発見されている。そのような2つ日付のある書字版は、現在10個知られている。それらは、1つを除いて全て「第41年」と同じであり、明らかにアルタクセルクセス1世と「ダレイオスの在位年」のことである。1つの例外は、CBM 12803であり、本文には「41」の代わりに「第51年」がある。そして、10個の本文から1つ(BM 33342)を除いた全ては、ムラシュ古記録にあり、「ダレイオスの在位年である第41年」の2つの日付がある9個の本文は以下である。

BM 54557: (=Zawadzki JEOL 34 から 45 ページ) シッパルからの本文 [?] 日付はダレイオス2世の在位年(第9の月[?]29日)のみだが、本文は時間の長さ「第5の月、Ar(takshatsu ...)の第41年から第12の月、ダレイオスの在位年の第41年の終わりまで」(この本文の情報は、1999年1月29日付の手紙で、ムラシュ古記録の専門家のマシュー・W・ストルパー教授から受け取ったものである。)

Bertin 2889: 「26日、第11の月、第41年、ダレイオスの在位年」の日付がある、バビロンからの本文。本文は未出版だが、日付に関する情報は2003年7月3日にDr. Francis Joannès のジーン・フレデリック・ブルネットから受け取ったものである。(2003年12月22日付のブルネット・ジョンソンからの郵便)

BM 33342: 「Shabatuの月[第11の月]、29日、第41年、在位年、ダレイオス、諸国の王」(AMIのマシュー・W・ストルパー、第16巻、1983年、231から236ページ) この本文はムラシュ古記録にはない。

BE 10 no. 4: (=TuM 2/3, 216) ニップルからの本文で、14日、第12の月、第41年、ダレイオス2世の在位年、諸国の王と記されている。

BE 10 no. 5: ニップルからの本文で、17日、第12の月、第41年、ダレイオスの在位年、諸国の王が記されている。1行目には「第41年のAdar(第12の月)が終わるまで、ダレイオスの在位年、諸国の王」と記されている。

BE 10 no. 6: ニップルからの本文で、ダレイオスの在位年が記されているが、月と日は判読できない。だが、2行目以降では、「第41年の第1の月からダレイオスの在位年の第12の月の終わりまで」すべて記載されている。

PBS 2/1 no. 1: ニップルからの本文で、22日、第12の月、第41年、ダレイオス2世の在位年が記されている。

BE 10 no. 7: (= TuM 2/3, 181) ニップルからの本文で、ダレイオス2世の第1の月、2日、第1年記されている。6行目では、「第41年、ダレイオスの在位年」の食品の受取について言及している。

PBS 2/1 no. 3: ニップルからの本文で、ダレイオス2世の第1の月、5日、第1年記されている。2から3行目では、その期間「第12の月、第41の年、ダレイオスの在位年の終わりまで」の税金を参照している13行目では「Adar(第12の月)、第41年の終わりまで」と記されている。

リストで使用された簡略についての説明

AMI:

Arehaologische Mitteilungen aus Iran.

BE:

「ペンシルバニア大学バビロニア探査隊シリーズ A: 楔形文字テキスト」、H・V・ヒルプレヒト著 (フィラデルフィア、1893年から1914年) 第1から6巻、アルバート・T・クレイによる改訂版、1904年

Bertin:

G. Bertin, Corpus of Babylonian Terra-Cotta Tablets. Principally Contracts, 第 1 巻から 6 巻 (ロンドン、1883 年). 未出版

BM:

大英博物館

JEOL:

Jaarbericht van het Vooraziatisch-Egyptisch Genootschap “Ex Oriente Lux”.

PBS:

ペンシルバニア大学。大学博物館。バビロニアのセクションの出版物。

(フィラデルフィア、1911 年から)。最初の 2 巻はアルバート・クレイによって改訂された。TuM:

Texte und Materialien der Frau Professor Hilprecht Collection of Babylonian

Antiquities im Eigentum der Universität Jena (Leipzig).

これらの 9 つの本文はすべて、ダレイオス 2 世が後継者として第 41 年に王位についたということを示している。書字版はアルタクセルクセス 1 世が 41 年以上も統治するなどできるはずがないと明白に示している。上記で述べたように、1908 年にアルバート・クレイによって出版された本文は、ものみの塔協会に唯一引用されたものであり、上記の 2 つの日付のある書字版と同じカテゴリーに属する。唯一の違いはダレイオスの前任者の統治が 41 年ではなく 51 年であるということだけだ。書字版の「51」という数字は誤記であるというのは極めて明白である。これが唯一の合理的な結果であろう。もし他に結果があるとするれば、上記の 9 つの書字版にある「41」という数字はすべて誤記であると主張することだ。

ものみの塔協会の著者たちが、ダレイオスの在位年の2つの日付がある書字版の存在に関して全く無知であることは考えにくい。たった2つしかない誤記(第「50」年と「51」年)の書字版を引用したり、ダレイオスの在位年と前任者の第「41」年が同じである2つの日付の書字版すべてについて、無言を貫くというのは正直とはかけ離れている。

書字版の「51」という数字を間違えたまま出版したアルバート・クレイは、それが誤記であったと十分承知している。彼の出版物のコピーで、間違えた数字の右側に、「41の間違い」と指摘し、記載した。

書字板「CBM 12803」、アルバート・クレイ著、ペンシルバニア大学バビロニア探査隊シリーズ A: 楔形文字テキスト 第8巻(フィラデルフィア、1908年) 第127号、1ページ、プレート 57

そのような間違いは起こりやすいものである。くさび形文字の「41」と「51」は、ほんの小さなくさびなのだ。スタイラスでのワンタッチの違いだけである。そんな間違いは珍しいことではない。「40」ではなく「50」の数字も同種の間違いの例である。マシュー・W・ストルパー教授はこう説明している。

「はい。それは非常に簡単な間違いである。ご存知かもしれないが、密接した4つのくさび形文字は数字の前にある「年」を意味する。「41」にある「40」の桁は、わずかに異なる配置にある、さらに4つの密接したくさび形文字によって表される。

余分にくさびを加えるにはちょっとした間違いも起こるだろう。—1999年1月29日、ストルパー・ジョンソンからの手紙にて」

アルタクセルクセスの統治期間が天文学的に固定

アルタクセルクセスの統治期間の決定的な証拠は、書字版に記載された統治の日付の数からわかった天文学的な情報である。

そのような本文は「VAT 5047」の天文学的な「日記」であり、アルタクセルクセスの第 11 年に日付がある。本文に損傷はあるが、惑星と水星、木星、金星、土星に関する 2 つの月の位置についての情報を保管していた。この情報は、この本文の日付が紀元前 454 年のものとして確認するには十分だった。これはアルタクセルクセスの第 11 年だったので、前年の紀元前 455 年は、ものみの塔協会が主張するような彼の第 20 年目だったはずがなく、彼の第 10 年目だったのだ。では、彼の第 20 年目は、紀元前 445 年または 44 年だったに違いない。(Sachs/Hunger, *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, 第 1 巻 Wien, 1988 年、56 から 59 ページを参照)

第 21 年とクセルクセスの最後の年の日付がある書字版もいくつかある。そのうちの 1 つである BM 32234 は、クセルクセスの第 21 年目の第 5 の月の 14 日か 18 日の日付があり、「18 年テキスト」や「サロステキスト」と呼ばれる。天文学的情報は紀元前 465 年という年を定着させ、書字版に保管した。本文は以下の面白い情報を含む。「月 V 14 (+x) クセルクセスが息子に殺害された。」この本文は、クセルクセスが 21 年間統治していたことを示すだけでなく、彼の最後の年が、協会が信じる紀元前 475 年ではなく、465 年だったことも示しているのだ!

クセルクセスとアルタクセルクセスの統治期間をカバーしている「サロステキスト」がある。彼らの統治期間の異なる年月の中で起こった月食に関する多くの詳しい日付の記述が、絶対的な年代記としてこの期間の年代記を作り上げた。

クセルクセスとアルタクセルクセスの統治に関する 2 つの他の天文学的書字版、BM 45674 と BM 32299 は、金星の観測の日付を含んでいる。そしてまた、これらの観測が絶対的な年代記としてこの期間の年代記を作り上げたのである。

このように私たちは、くさび形文字の書字版に保管された、クセルクセスとアルタクセルクセスの統治期間のいろんな部分の日付がある天体観測を多く持っている。多くの場合、統治の始まりと終わりを作るには、これらの観測の 1 つか 2 つだけで十分とされている。しかし、彼らの統治期間の日付がある天体観測の総数は、およそ 40 またはそれ以上である。したがって、彼らの統治期間を変えるのは 1 年でさえも不可能なのである! 協会のアルタクセルクセスの

第 20 年目を紀元前 455 年とするのは、はっきりと間違いだといえる。もちろん、これはダニエルの 70 週の解釈も間違っていると証明できる。

ダニエルの 70 週

ダニエルの 70 週の多くの応用が、何世紀にもわたっていろいろな人々にされているのが見受けられるが、ものみの塔協会のものを含む何人かは、一度それを捨てる必要がある。なぜなら、それらは歴史的に作られた日付と矛盾しているのだ。それらは現実とは無関係である。

もしアルタクセルクセスの第 20 年目が、455 年のかわりに 445 年または 44 年だったとしても、その年からやり直すことはまだ可能である。ただし、365,2422 日の太陽年のかわりに 360 日の「予言の年」を使うならばだが。これはサー・ロバート・アンダーソンが彼の本「来たるべき君主」(1895 年出版)の中で実際に計算してみた。彼の応用は最近、H・W・Hoehner の本、キリストの人生の年代的側面 (1977 年)の 135 ページ以降によって改良された。これらの著作者は、アルタクセルクセスの第 20 年目の紀元前 445 年または 44 年から、キリストの死 (もし西暦 33 年とするならば) までの 476 年を示しており、360 日の 483 年に相応する。(476×365,2422 は 173.855 日であり、もしこれを 360 で割ると 483 年になる。) これは応用の例の 1 つである。

もちろん、この題材についてもっと多くのことが言えるし、言われるべきだ。前述のページでは、もっと重要な観測について要約をしようと試みてきた。時々、エホバの証人のメンバーや他の人からこの問題について便りが届くし、たぶんこの要約はこの問題について疑問に思う人たちにとってもある程度有効であるかもしれない。将来、この問題についてのより詳しい議論について書く時間を見つけないと思う。